

M.L.システムを活用した初心者のピアノ指導における成果と課題

—学生に対する音楽技能調査の分析を通して—

赤津裕子（竹早教員保育士養成所）

進行：脇山 純 書記：田中功一（文責）

はじめに 本校では5年前よりピアノ初心者を対象に、M.L.システムを用いた初心者用カリキュラムの作成に着手してきた。背景には入学者の半数以上が初心者という状況があり、その中で保育の実践の場で通用する技能の習得を目指すためである。これまでの研究の経緯を順に示すと、1)学生の実態調査による問題の所在の把握、2) M.L.システム導入による指導方法の見直し、3)指導内容の検討による教材の見直し、4)学習管理のための個人カルテの作成、5)年間シラバスの作成による学習内容の可視化、そして今回実施した6)音楽技能調査により、この5年間を概観した。

研究の目的 新しいカリキュラムに取り組んだ初心者がピアノの基礎技能を習得し、音楽能力を高めることができたかを明らかにし、音楽技能を習得する過程において、M.L.システムが及ぼした成果と課題について検討することである。

研究の方法 初心者カリキュラム受講学生18名を調査対象とし、平成26年度9月及び2月に調査を実施した。調査方法は、第一に、演奏技術・表現力の調査として、前期はバイエル94番または96番、後期はブルクミュラー25の練習曲から1番または5番、及び子どもの歌の弾き歌いを期末試験課題として演奏した。第二に、音楽基礎能力の調査として、右手のみの旋律課題を中央ハ音から1オクターブの音域で、前期は4分音符と8分音符の音価の違い、後期は付点8分音符と8分音符の違いを初見奏から読み取って演奏できるかという課題設定とした。また、両手の初見奏はハ長調の簡単な右手メロディーと左手が主要三和音からなる課題設定とした。ハ長調、ト長調、ヘ長調、イ短調の音階奏を両手で弾く課題も実施した。第三に、心情面の調査として、学習の取り組みについてアンケートを実施した。

調査結果 次に、1)演奏技術・表現力の調査、2)音楽基礎能力の調査、3)心情面の調査の順で述べる。1)演奏技術・表現力の調査では、全18名の成績を[前期→後期]で示すと、70→再、60→80、78→85、60→72、78→85、80→85、69→再、77→84、78→82、68→再、78→80、80→85、80→83、60→再、78→80、70→75、60→80、80→82となった。再は再履修を示す。結果は再履修4名を除く14名は成績が向上し、内容的にはタッチも改善して表現力も良くなった。再履修者が4名出たことから全体に二極化の傾向が見られた。2)音楽基礎能力の調査(①初見奏と②音階奏)では、①初見奏において、旋律課題及び4分音符と8分音符の音価の読み取りともほぼ正しくできた。また、主要三和音の読み取りは和音を塊と捉える傾向が見られ、

全体によく理解できていた。課題点として「音の羅列」ではなく「拍にのる」ように楽譜を捉えて弾くことが指摘された。付点音符のリズムを感じて正確に弾く読み取りでは、初見奏において困難な様子が見られた。②音階奏において、ハ長調では前期14名、後期18名全員が弾けたが、ト長調では前期5名であったが後期は13名が弾けた。それに対して、ヘ長調では運指が異なったため、つまずきの様子が見られた。また、イ短調は後期から実施したため困難な様子が見られた。3)心情面の調査では、設問とした「毎回の授業にしっかり参加できたか」、「課題に一生懸命取り組んだか」、「授業はわかりやすかったか」ではたいへん前向きな回答が多く見られた。

考察 前述した成果に対して、M.L.システムの関わりを考察する。第一に、M.L.システムの直接的な機能による効果が考えられる。具体的には、①ヘッドホンによる「ピアノに触れる時間が少ない」ことの解消、②ブロック別学習指導により連弾やアンサンブルが音楽的に楽しめること、③メトロノームや録音による「指がスムーズに動かない」ことへの支援、以上である。第二に、多様化した指導内容に起因した効果が考えられる。それは、授業の5つの柱とした「指の練習・発表・読譜・主活動・課題の説明」が学習効果を広げることが挙げられる。第三に、学生相互及び指導者とのコミュニケーションによる効果が考えられる。苦手意識やピアノに向かえないことへの支援、そして音楽的に楽しめず練習方法がわからないことへの対策が挙げられる。これらは、学習者が互いに教え合う共感的感情により、授業に対して安心感をえると考えられる。

次に、M.L.システム導入に伴うカリキュラム改善に対して、指導者研修の実施が効果的だったことが考えられる。研修内容1)M.L.機器の使い方、授業への活かし方、2)授業の事前打ち合わせ、教材研究、3)事後の振り返り、4)気になる学生、5)実践の情報交換、6)評価の分析、7)内容・方法の改善、以上についてPDCAサイクルを5年間行ってきた。成果の一つとして、音階と主要三和音のテスト調査結果で正しく弾けた割合「H26前期→H27前期」を比較すると、78→100%、27→87%、39→81%、56→97%、という結果から、前期の取り組み方の工夫により成果が表れたと考える。この背景として指導者研修の継続的実施が考えられる。

今後の課題 1)付点のリズムの習得(理解と表現)、2)欠席した際の学習の空白に対する対応策、3)在籍2年間の追跡調査、4)集団授業での調査対象人数の拡大及び個人レッスンの初心者に対する調査と集団授業との比較、以上が挙げられる。